聖霊降臨祭・教会創立141周年記念・帰天者記念聖餐礼拝説教要旨　【2015年5月24日】

# 「 父の霊が証しをする 」

ーマタイによる福音書講解説教 49ー

出エジプト記　　　　第4章　10節～13節
マタイによる福音書　第10章 16節～23節

説　教　　岡村　恒　牧師

「あなたがたの中にあって語る父の霊」(20節)。世界中の教会が今日、聖霊降臨祭(ペンテコステ)を祝っています。主イエス·キリストの霊、聖霊があの日、弟子たちの上に注がれました。主イエスの約束が成就しました。イエス・キリストによる救いを信じ、信仰を告白して洗礼を受けた者は皆、約束の賜物として主イエスの霊をその内に注がれ、自分の内にイエス・キリストご自身が住んで一緒に生きて下さることを繰り返し確認しながら歩みます。聖霊が内に住むとは、やがて終わりの日、イエス・キリストが本当に来て下さることの証拠でもあります。

今日お読みした聖書の箇所は、主イエスが弟子たちを、神の救いの約束について宣べ伝えるようにと派遣なさる時に、噛んで含めるようにしてお語りになった言葉の一部です。同時に、今ここにいる私たちに向かっても主イエスが語っておられる言葉です。『私は必ず来る』と言われる御方が、その時まで<期間限定>で私たちに特別な使命を与え、遣わすと言われるのです。狼の中に羊を遣わすような仕方だが、心配をしなくても良い。何をすべきか、何を言ったら良いかは私が教える。私があなたを用いて語らせる。私はあなたと一緒にいる。私があなたを召して、あなたを変え、あなたに与えられた賜物を用いて働く。これが主イエスの約束です。

今日、聖堂に多くの写真が並べられています。彼らがどのように神に愛され、選ばれ、信仰を与えられたか、その写真は物語ります。また、今日私たちは大阪教会創立141周年の記念の日を祝っています。1874年5月25日、5人の兄弟たちが罪の赦しの洗礼を受けて、聖霊の宮として新しい人生を歩み始め、激しい戦いや迫害の中で主イエス・キリストについて宣べ伝えました。彼らが聞いて信じていた約束は一つです。イエス・キリスト、神のひとり子を救い主として信じる者は、神に裁かれて滅び去ることはなく、永遠の命を得る。この一点です。

キリスト教会は、主イエス・キリストが再び来られる時を心待ちにして歩んできました。今から2,000年前も、新しく生み出された大阪教会の信仰者たちが生き始めた141年前も、今日私たちの前に写真が並べられている愛する信仰者たちが生きた時代も、変わりません。『主よ、来て下さい』と祈るキリスト者はいつでも、世の終わりが間近に迫っていることを意識して生きてきました。

そういう時代を生きる者は、証言台に立たされると、聖書は言います。私たち自身の中に、神を神として受け容れない不信仰な思いや、神の力に対するあきらめや失望、といった誘惑が繰り返し湧き上がります。それが私たちの心の内の法廷です。本当に聖書が語る神はいるのか。イエス・キリストが救い主だというのはどういうことか。やがて世の終わりが来る、イエス・キリストが再び来るというが、どこにそんな保証があるのか語ってみろ。そういう声が私たちの周りから、また私たちの内側から繰り返し湧き起こります。『心配しなくて良い』。主イエス・キリストは、はっきり言われました。「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である」(20節)。私たちを生かす聖霊が私たちに語りかけ、私たちの内から語り出して下さる。主イエスが共にいて下さるのです。

地上の生活はいつでも戦いや争い、悲しみに満ちているように思われます。肉体の痛みや心の重荷を負って私たちは歩みます。しかし、主は言われるのです。『わたしはあなたと共にいる。耐え忍ぶ生活を希望と喜びをもって縁取り、確かな約束をもって支え、わたしは来る。その時まであなたは地上を歩んで良い。あなたをわたしのもの、聖霊の宮とする』。父と共にある聖霊が私たちのうちに宿り、私たち自身に語りかけ、私たちの力になって下さる。その約束が、私たちを地上の歩みへと送り出します。口を開いて、自分が何者か、神が私に何をして下さったか、証しして生きたら良いのです。神は、私たちひとりひとりを思いもしない仕方で、大胆に用いて下さいます。

日曜日ごとに私たちはこの場所で、ペンテコステを追体験しています。ひとりひとりに神御自身が臨み、私たちの内に住んで、私たちを礼拝の場から送り出して下さるからです。今日ここから、私たちは新しい歩みへと踏み出します。その歩みは主イエス・キリストの再臨を確信して心待ちにする希望によって支えられた歩みです。何者も、私たちからこのキリストの約束を奪い去ることは出来ません。主イエスは必ず来られます。その時を心待ちにして歩みましょう

（記　説教要約奉仕者）